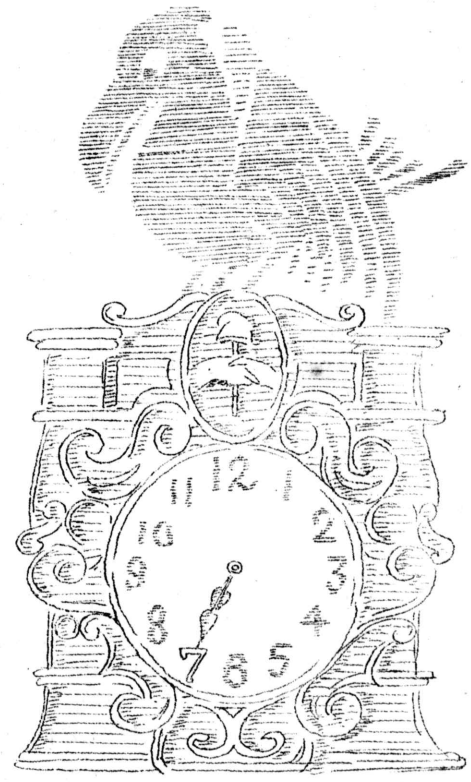
西尔然丁時報
附録藝文

第拾七號

第參卷



Jul. 28 de 1928

Año III
No XVII

1816 - 9 D JULIO - 1928

SUPLEMENTO LITERARIO
"EL ARGENTIN DUIJO"

レーニンと藝術

（ザ・アート誌所載ア・ルナチャルスキー回想録より）

T・T・生

レニンの生涯は、殆んど藝術を観賞する時間を持たなかった程せわしかいものだった。だから彼自身、其方面には素人だと思って、あまり藝術の事に就ては云々しなかったものだ。然し彼の趣味は非常に自然的でロシア古典派の風景画等には可成りの親しさを持ってゐた。

一九〇五年の第一革命の頃、彼は同志レッチェンコの家に宿った事があるが偶然そこに世界の名画集があったのでそれを見て、翌朝、私に言ふたものだ。

『藝術の世界って奴はなんて素晴しい魅力を持ってゐんだろう。そしてそこには共産者のとるべき任事がまだうんとこさあることき訓えるんだろう。非現は眠うずにとうく朝まで繰り返し〳〵見て居たが、俺は今迄藝術研究の時間を得られなかったし、又それからとも無論ないだろうと思ふと、思うなく淋しい気がしてならない』

革命後、救世主寺院の側にある素敵とない立派なアレキサンデル三世像の代りに建てやうとする記念像を募集した時、その元型展覧會に彼と共に行った事があったが、レニンは總ての紀念像を熱心に観てまわった末、とうく彼の気に入るものは一つも見出されなかった。殊に未来派の像の前では不思議想な顔きして立ってゐたが側の人から、それに就いての意見を求められると

『俺は何だかサッパリわからないが、ルナチャルスキーに聞いたらうよからう』そこで私も立派なものき見出し得なかった旨答へると、我が意を得たりとばかり合点いて彼は言ふた。

『さうかい。俺は又君が未来派の変なのに對して何とか同情ある理窟をつけるかと思った』

彫刻家アーリットマンが、革命家ハルトーリンの等身肉彫（レリーフ）きレニンに贈った時、彼は非常に喜こんだが、その作品が、未来派のものではなかろうかと私に聞いたことがある。未来派に對してレーニンは徹して反對であった。

レーニンは又音樂が非常に好きであった。

いつか私の家で素晴しいコンセルトをやった時、シャリアーピンを唱ったし、メイチク・ロマノフスキー其他一流の連中が出演したものであるが度々レーニンに電話をかけて

『俺は非常に音樂が好きなのだが、まあ考へても見て呉れ、偉大な音樂はこの俺をすっかり恥溺させるんだぜ。だから何んとなく音樂から或る種の大きな圧迫を感じて仕方がない』と。

事實同志チュルパと言ってゐたが、レニンは音樂を聽きながらいつも非常に興奮してゐる様だったと。

レーニンは大劇場に對しては可成りに神経質だったといへる。或る時私が劇場に對する補助金は少し安い様だと言った時レーニンは

『現在のロシアに於て、田舎の小さな学校に對する費用さへ足りない時、あんなものに、そんなに沢山な補助なんが出せるもんかと言った。

又彼が劇場き攻撃した時、私が辯護して、

小春日和

堯民

麗らかに晴れた小春日だ。日本で日本晴って言えば珍らしく、よく晴れ渡った日でも空の何處かに雲のきれが漂ってるがアルゼンチンの日和と来たら文字通り天に一點の雲なくといふ快晴だから愉快だ。

今日その愉快な日和だ、わけても日曜なんで尚更有難い。この周囲から冬に珍らしくポカ〳〵暖かい変調の陽気にだまされて窓越に見える街路樹の梢に若芽がやわらかに出かけてゐる、何といふ大気の微妙な動きに正直な木の心でめうう。あれで今宵にでも急に寒くなればひとたまりもなく萎れ果てねばならぬ哀れな運命にあるその白ミミさてもしらしらしく正直なることよ、ミミ

机の上に書きかけの原稿を置いて考えてゐると、ピアノの音が流れてくる、隣に飼ってある小鳥がキと叫んでゐる、籠の小鳥も啼いてゐる、角のアルマセンの前で無邪気に遊んで居る子供の声がする、窓に射し込む日の光は胸の底迄溶け込むやうだ。凡てはにぎやかな雰囲気だ、まるで木枯に吹き飛ばされてゐた音響のにぎやかさが一時に戻って来た様だ。

窓を開ると遥かアベニーダ・ラプラタに聳ゾ立つ寺院の尖塔がほこらかに輝いてゐる。そこうをハトポッポがとびまわってゐる、三軒隣のよく僕に挨拶する金髪の乙女がにこやかに門口に佇んでゐる。辻音楽師の姿と楽器のひびきも小春日にふさわしい。

庭に出た――三毛の親猫をとりまいて生れて四五ケ月の小猫がぢゃれてゐる、三毛から真黒や真白やまだらの子が生れる――メンデルの遺傳法が何か知らん、が隨分変なことだと思って見てゐると小猫は親猫の耳や眼や鼻やロも無遠慮に前足でかきむしる（下段右半に）

（前頁よりつゞく）

劇の持つ大きな文化的意義を説き立てたところが彼は非常に怒って

『たがそれは急に角高等遊民的な文化だ。ブルジョアの文化なのだ。それに對して何人も文句ははさめまいが、ミミ』

然しそれだからと言ってレーニンが過去の文化に敵意を持ってゐたわけでもないのだ。

特に彼が安逸階級的だといったのはオペラの貴族的な調子がそんな風に感ぜられただけで、どっちかと言へば過去の藝術、即ちロシアのリアリズム及後期印象派に對しては可成り高く評價してゐたやうだ。

最後に一言して置くが革命中に起ったロシアの美術、演藝、文學の形式は、レーニンその暇がなかったのにもよるが、大部分彼の注意をひかなかったことは事實だ。

だからマヤコフスキー（未来派の詩人）のレーニンを絶賛した

『一億五千萬』と題する途方もない詩を恐らく地下のレーニンのお気に召さなかったこと、思ふ。

また レーニンが活動寫真に對して非常に興味を持ってゐた事は何誰も御存じのこと、思ふ。

（上段よりつゞく）

様にして（心にふざけてゐる。まるで攻防の術を練習してゐるやうだ。それを大ぜ眼をつむってなもがまゝにまかせ枯々尾を振ったり小猫の背中をなめてやったりしてゐる。親猫の姿は落ついたものだ。そこにも親の愛が見える。冬に咲くバラは花の稀な小庭に異彩を放ってゐる。原稿に筆とるにふさわしからぬ小春日を公園の散策に出かけた。（ス）

隨想

地に祈る

兎 民浪史

天も父とし地も母とする人の子は、生々さて宇宙萬有の創造者の絶大なる能力に向って感謝する、而して大自然の把握の恩惠を讃美する。

澄みて淫かな大空を望む時、燦然たる陽光、淡々たる月明、星影の明滅を仰ぐ時、人の子は天上の偉大なる姿の前に伏す、そして物思はされる。其處には言ふ可からざる崇高なる大宇宙の意志を見出せる、幻の如く消えせん樂園を幻の如く行うされる。其處には言ふ可からざる崇高なる大宇宙の意志を見出せる、幻の如く死して我魂魄せん樂園を幻の如く に戚裡に映ずる。同時に激烈なる笞の恐怖にも心おのゝく。

人は自らに近いものに愛着を感じ親しみを持つ。天はあまりに遥かにして遠く高く偉大にして人の子の推理想像をして遂に到達し得られない。されは父たる天に對するよりも母たる大地に對してより愛着を抱き親しみを持ち、そして祈る。地は我を生み、我を育み、我を住ましめ死かばね我を歸らしめる。偉人を生み聖者を出し、麗人を育くむ、これ凡て地である。

和歌も詩も音樂も繪畫も天のものであるよりも、より地のものである。

かあらねばならぬ。

若草もゆる春の野にたゞやう甘き土の臭ひ、清水湧き、谷川せゝらぐ山地の幽玄、白輪の光りに輝く盛夏の樹々の姿に緑の影さす大地、落葉をゝとして散り行く晩秋の靜寂の地、月光淡く照す冬枯の大地の閑寂、牛馬、白羊、羯犬の群り遊ぶ大平原の平和、孫笑く大雨至つて凄慘、魂も寒からしむる廣野、地光うゝかに照つて白露玉ときらめく草原の清爽、落日燦として沈み行く地平線上の偉大ミミおゝ人の子は地に祈る。

人生問題、社會問題の多くは天に屬せずして地に根ざす、地上に生くる人間を中心として展開される。地の成陥、地味の枯渇は人生に行詰を来らす。波路はるけさ、彼方、祖國に於る同胞の苦しきあえぎ聲、地上に虐げられて祖國なき、ユダヤ民族の神さ、高原世界に冠たるロッキー山下、米國民の心のたゞかり、自由と平和の風もびく大亜細亞市民が持つ悠長闊大の氣象、テームスの河畔、霧に明け霧に暮れ行く英國民の保守的氣象、偉大なる恒河々畔に生れし幽玄極りなき印度哲學ミミ我等人間は地上に在つて眞、善、美、偽、邪悪等樣々の相を形づくつてゐる。

されば我は地に祈る。

太古イスラエル民族が罪と悪との満ち

文藝春秋

新竜生

嶺東民の創作に久方振りで接した。『園藝の亜尼然』の創刊号に發表された短篇小説『花と憐死する人』がそれである。忌憚なく言つて同氏がかつて時報紙に發表された『都の蔭』などは可成長いものであつたが性文字の羅列に過ぎない心地がして創作的情熱が薄くて動かうず物足りなかつたが『花と憐死する人』には創作的情緒のみなぎりが可成濃厚に現はれてゐて良つた。どちらかと言えば作中の人の會話に余り妙を得て居られぬ氏であるが『花と憐死する人』に取扱はれた會話は余程洗練されてあつた。殊に序言に於ての激甚なる物質的生存競爭場裡に在て土に親しむ友と交際つて胸を打あける幸福を感謝するとつて居られる氏の氣持があの作品をものせしめたことを知つて私共嬉しくなる。そしてそうした気持自分ことに思ふ。冬枯の感ある同胞文藝界に於て春秋子を喜ばせたもの一つであつた。自重を祈る。

太田外傳氏が『亜細亞の農業誌』に發表されつゝあつた農民創作の

牧場殘星

私は今日迄幾回となく牧場生活を味つてゐる、二回目でエスタンシアに対する印象も可成鮮明なものがある、汽車で廣大かゝぶき縫ふて走つて先づ第一に感ずることは景色が極めて單調なことでローレンスやチエホフの様な人文豪はかうした環境の地にはどうしても生れさうに思えない。

限りない大自然に抱擁されて羅のあい載む水に白を送る田園の子供達の姿を眺める時、私は常に一種の快感を味ふ。彼等の前に展開されるフイルムは釈放の限りない平原と其處に動めく牛や馬や羊の群である。

そして語る友も稀である。だが然し彼等は二つの大きな誇るべき友を、我等以上の親しみを以て見詰め得るところの持権を有してゐる。

それは天と地とである。俗塵の外に超然として、天と地を友とする彼等には虚偽や誇張、偽善など様々の醜い姿は恐らく見出せないであらう。

自然と言ふ慈母の特別な恩恵に浸りながら、自然が有する多くの子等—牛や馬や白羊の群—を見守りながら彼等は何處迄も暢んびりと肯ち行くことであらう。

かう考えて行く時、羨望の思潮は胸の一隅に深く流れる。

然し彼等は一体どんな具合に放育されるのか、全くこの点では不自由なのに違ひない。恐らくそれが彼等にとつては最も大きな淋しみであらねばならぬ。

然し子等よ！汝達は幸福だ。些かばかりの学問をして学ち誇った様な顔をして自己陶酔に耽つてゐる都會人よりも、例令智に於て劣るとも、美くしい心の持主であるお前達がよっぽど恵まれてゐる。そして貴い。

私は前者に対して反目する。そしてお前達と接手するであらう。いとし子よ御身達はランポに生をうけ、ランポで育ちランポで暮し、そしてランポの土に帰るべく運命づけられてゐるのであるかと知れないとしてもそれでいいのだ。

子等よ見よ、あどけなくも蜜を若草の影や、黄昏の緑草の上で舞踊してゐる姿を

…… Por un camino, huyendo entre
los pastos me fui alejando,
mientras pensaba en la amistad…

我も亦汝等と共に叫ばん
都の子等に。

× × × × ×

夜は一つの緑舟のやうに無数の巨手を差のべて宇宙の門戸に到達する。

第一接播の上にたゞ一つの提燈を選びつゝある天体に一つの浜辺を見出さんが為に放浪の歩みをけてゐる。

そしてさも疲れはつた姿で疲眼を足下に注いでゐる。

彼がまとへる廣く長い黒衣の下には浸潤を夢へし酔人あり、眼光炬の如き怪人あり、緑鮮帽の婦人あり、裏腹心理を紛用しはつた重足反目に超然とした タイプの男あり。

然しそれ等は総て暗夜の牧場に空をにらんで立てる樹々の精の幻影である。汽車の窓外に見た実景そのものよりも、かうした牧場の夜の想像画の方がより深刻に、より面白く私には感せられる。

（完）

冬の一日（短信）

総べての音響が空へ飛んで行つてしまつたやうに静かな冬の一日でした。

静止した流れを吊り橋から見て居ると何にか知らぼんやりした憂愁を覚える、そんなに長閑かな平和な冬の日でした。　ただ例のK君がこの静寂な空気を無遠慮に震動させて対ひ岸から盛んに冗談の連発をやつて居ました。

あの太平な冬の日の思ひ出の中でそれは今でも僕を微笑させるものでした。

ティーグレにて　腸水鉄弥

詩

裸木

マツ弥

厳しい
冬の荒野に
まばらに
高かい木立が見える

素っ裸で
燦然と
陽光に輝やく
青空を圧して直立した
君の姿！

精々と
さわやかな男性的快感が
私に突貫して来る

君の筋肉！
君の骨格！

何んと！
君の姿態は
『自然のスポーツ・マン』と
言はふよ

――フーリオ・十四日――

詩

汽車の窓から

マツ弥

強よく
手を振って
私は
この大きな愉快を
知らせやうとした

あっ
あちらでも
遠く
小さく
野に狩する人が
鳥打帽を打ち振って居る

裸の自然と
明かるい光
『晴だ！何んと自由な健康な晴だらう』

汽車の窓から
私は
彼と彼の愛犬の
祝福を祈る

――フーリオ一九二八――

雑詠

尭民

○わが心、弱き得ぬ不思議地の底に生きてうごくと思ふことあり。

雑詠

任コリエンテス市　幾星

○冷やかに笑みたかぶりておごり咲く紅の薔薇に心許すな。

○深み夜の吾枕辺の夢に入りあうむ限りに笑え緋の薔薇。

○風強く雨とやらん夕暮き寒さにそよぐ愛のパルメラ

○一陣の嵐や冬さびて中空に残る月の影澄ちむ。

○住む人の在りと知られて山あひに一村なびく夕煙かな

○生業の心淋さに似ぬものは炭焼く賤が煙なりけり。

○パラナ河の水のせこうぎ眺めつゝカンテラの灯もうく光る

○笑み交う瞳の色と異なれる異國の人と語るわれは。

○別れけれはことさら別れ身にしみぬ夜篝淋しく寒空にきく。

○たぐひなき国に生れし身の幸を祝ふは民ほこりなりけり。

○女あり没落はるけき故里に我待つとさく夜半のゆめもり

○あめつちの静寂月澄み風凍る冬の夜かかに親をし思ふ。

○許しませ別れてここに五年の旅路のつかれ筆とりも得ず

○かもしかり旅路の故か朝夕の雲のうごきも物憂しと見ゆ。

文藝春秋のつゞき

が消えのあこがれから、海に就いての作品をものされんことを切望しつゝ待つものである。

残星氏の小品の牧場と夜の雅詠とは共に物足りぬ感じがする。それは文章そのものゝ巧拙からの謂でなく、胸に燃え立つ感激の迸りに乏しく何だかおつとめ的にペンを採り、想をかたむけられたのではないかと言ふ傾向があるからである。氏の言はれる様に牧場に就いての印象は可成深いものがある氏としては今少し力強く細かに気持を現はしてほしかった。和歌も歌はんとせらる、対照、中心点がはつきりしてゐない様に思はれ上の句と下の句とに連絡が乏しい様に感ぜられる。春秋子が斯く言ふのは決して一応のけちをつけるといふ気持からではない。何故ならば私は常に忙がしい実生活の中に尚本を読み文藝物に筆を執らる、人の気持を貴いことに思ひ、或る種のミイラ変性のやうに心情の硬化した人の様に下らぬことゝ又は自己満足だとは考へて居ないからこゝ氏の自愛を祈る。

詩人ならぬ春秋子が詩の畑に迄批評の筆を入れるのは僭越であり失禮であるかも知れぬが同人てつ弥氏の詩は何と言っても海外に於ける邦人の詩壇では一寸比類のない得難い程すぐれたものである。詩の持つ妙味は簡明なる字句の中に言ひ知れぬ余韻を含んで読者の思ひを知らずゝゝの中に詩境にみちびくにあるが氏の詩にはこの妙味が豊かであるのみでなく読む人をして(尤もミイラ化した人は別だが)自然の力の前に誇ふ力がこもつてゐる。てつ弥氏は一本の冬木立、一羽の小鳥にも詩興が湧いたら三ヶ月でも二ヶ月でも永さは半年でも考へると君の友人が言つてゐたがそれだけの忠実さを自らの詩に捧げ得る人にして始めてあれ程の詩が生み出されるのであらう。これ丈の生みの苦しみをなめて作り上げた詩を目してさへ下らぬ自己満足だなど評し去るやうな人があったらよくよく血のめぐりの悪い人である。

同人南笛氏の想ひの純真、率直の筆致に興味を以って読んでゐたのは独り春秋子のみではあるまいが近来氏の想ひが発表されないのは淋しい。目まぐるしい現実生活の中にも寸暇を割いて自らの思ひを筆に現はすことはそれ自身に於いて貴いことである。文学者ならぬ文藝愛好者としての作品は文章、字句の巧拙は第二義で要はその思ひの深さ、体験の程度である。この意味に於いて氏の続稿をのぞむでやまぬ。

人間性にはかくあること又はあらねばならぬことを知らんとしてやまぬ慾求を持つてゐると共に、ある可らざる奇想天外、奇々怪々のことがらを考え又知らんとする性能を持つてゐる。これ怪奇小説、探偵物が世人に喜ばれる所以である。この点に、我等に興味を与えてくれてゐる作品は邦人文藝界で左の手氏が唯一人での蜘蛛の如きは今でも頭にのこつてゐる。近来氏の作品がないことも淋しい。折々独特の作品を発表せられんことを望む。

淋しいことの多い中で嬉しいことがある。それは目下週刊紙に連載されてゐる豆田情調百人一首である。大分こぢつけと無理もあるがそれはこうしたものに止むを得ぬことであつて、大体に於いて興味深いものである。一つ歌人衣子夫人の歌を同紙上で発表されたいものである。

書いてる中に余白がなくなつて原稿の半はも発表出来ぬ何れ次号でゝゝゝ